慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史學研究録 第一冊(中村勝麻呂氏著, 寶文堂書店發行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.2 (1927. 5) ,p.154(306)- 155(307)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270500-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學研究錄 第一册（中村勝寶氏著 寶文堂書店發行）

本書は、吾が史學の現狀に不服を懷かるゝ著者が、日頃の蘊蓄を傾けられたる研究錄で、嚴正なる學者的態度を持せられつゝ、奔放自在なる自己の意見を述べられてゐる。實にわだかまりのない、近頃めづらしい快著である。一體、今日、史學に對する見解は、同じ史學專攻家の中に於ても、千差萬別であつて、一樣に論じがたいけれども、史學が純然たる科學でなくして、一つの藝術であることは、今や動すべからざる眞理であると信ずる。蓋し、史學はその學問の性質上、多くの場合、間接に、比較的に、或る立場より類推するのが常であるから、何時の時代に於ても、史觀は時代の反映であり、且つ人格の表現なることは論を俟たない。然るに、研究法の一部分たる考證を以て、史學の全體と心得、味ふべき史學かして、近來益々無味乾燥ならしめたるは、あながち著者ひとりの不滿とする所でなからう。宜しく、史家は、史學の旗色を鮮明にし、進んで史學の價値を發揚すべきである。今本書を閲讀して、實に千古の知己を得たるかの感がある。以て本書をこゝに紹介する所以である。

本書は、先づ初めに當つて、建武中興後の社會狀態と足利氏の成功と題して、建武中興と明治維新とを比較せられ、一つが失敗し、他が成功したる所以を探られた。著者曰く、凡ての政治上の革命には、必ず破壞と建設との二面があつて、この二面が徹底的に行はれなければ、革命後の社會は決して安定しないものであ

る。然るに、建武中興は、その當代の社會狀態がこれを許さず、破壞も建設も共に徹底を缺き、極めてヌエ式の政治組織を築きあげ、公武の利害相反する結果に陷つたるに反し、明治維新の場合は、對外的事情と相俟つて、國民的自覺を促し、これが徹底的に行はれ、且つ新政府の革命後の施設方針も亦宜しきを得て、單なる古制の復古に止らず、よく當代の國民の共存共營の精神は合體したるが故に成功したるのであると。而して明治維新の場合に於ては、特に外來思想の力を述べて、吾が國に於ては武家政治は極めて自然的の發達であつて、裏に建武中興が失敗したのは、一にその爲めであり、明治維新といへども、外來思想、殊に支那革命思想の影響がなかつたならば、吾が國固有の微溫的思想だけではこの大變革を見なかつたであらうと。

『……之を倒すものが、例へば宣長の唱へた如き穩健なる我邦固有の思想でなくして、强大なる外國の壓迫に應じて沸き立つた、過激なる外來の革命思想であつたのは當然である。』三五頁

それから、人物論に於ても、著者獨特の見方をされてゐる。例へば、尊氏であるが、彼の生涯の外觀はいかにも時代の創造者のやうであるが、その實彼は貴族に通有なる後入齊であつて、彼自身風雲を捲き起したる事實は發見せられないと。從來の多くの歷史家の尊氏評は余りに素人臭いと。實に形式尊重門閥崇敬の建武中興時代の社會の事情からいつて、さもあるべきことであらうと思はれるのである。

それから次ぎに井伊大老傳を收めてある。本書は、寧ろこの方

の著者の研究の發表錄と見るべきであるが、著者には曩に「井伊大老と開港」と題する舊著あり、又近くは井伊大老傳編纂中であつたことは、恐らく人の知る所であらうから、こゝに別に贅言を要しないが、著者は、祖父の關係で、明治三十四年井伊家の囑託を受け、大老事蹟の史料整理にたづさはりしより、爾來久しくこれが史料の蒐集に從事し、研鑽を積まれたる處だけ、當事の事情や井伊大老の人物人爲等については、極めて明快、一點の曇りなしといふべきであらう。而して、全編を上下に分ち、上編を「井伊大老と仙英禪師」と題し、井伊家の菩提所彥根淸涼寺の住持仙英禪師と大老との關係を述べ、主として禪者としての井伊公の高尙なる內的生活を窺つてゐる。

下編を「井伊大老と長野大人」と題し、浪人の國學者長野大人と、大老との關係を述べ、主として國學者としての井伊公の半面の生活を窺つてゐる。而して、兩編を通じて現はれてゐるところの井伊公は、要するに信仰の人、自覺の人、意氣の人であつて、政治家としての公の面目が躍如としてゐる。本書の緖言に於て「幕末の社會現象中に井伊公の個人の勢力を認め、公の人格中に社會の影響を觀ることが、此の著述の目的である」といはれてゐる通り、本書はよく社會と個人と交涉するところの微妙なる史的關係の存する點を明にされてゐる。殊に自由自在に史料を驅使し、縱橫無盡に論破し去る所は敬服の外ない。終りにのぞんで、また次の研究を公表せらるゝこと希ふ次第である。（山本光郎）

小縣郡民謠集（小山眞夫編　鄕土研究社發行）

本書は爐邊叢書の近刊書。長野縣內の千曲川の中部流域に位する小縣郡の民謠を蒐集したもので、分つて兒童謠と成人謠との二類とし、前者を子守謠、言草謠、遊戲謠、流行謠の四別とし、後者を鄕土謠、風習謠、流行謠の三別とし、更に其細目を數十目に分けてゐる。成人語は出來るだけ地方獨特のものを蒐集せんと企てられたので、類歌はあまり見ないが、兒童にはまゝ他地方との類似のものがある。しかし本書を通讀した上での印象はむしろ兒童謠につよく、殊に手毬歌のごときは數から言つても多く、最も特色があるやうである。それにしても近代の作と思はれるもの、例へば『向ふ通る』中の一首や、『今日は元日』のごときは、なんの地方色もなければ、いやに敎訓めいたもので、あまり感心しない。がそれはとにかく鄕土研土研究が民衆生活の理解に最も重要であるけれども、その研究資料の蒐集が甚だ困難であつて、殊に民謠においてさうであることは、その蒐集に從事したものの誰しも感ずることである。從つて本書をなした編者の苦心と努力とに對しては、大いに敬意を表しなければならない。編者は『嘗て舊樣式中に成人と成つた時、何の不審も疑惑もなかのたのであつたが、今日にして之を思へば、かくも變るもの哉と痛切に感ぜられ、日一日と滅び行く鄕土の風習——而も嘗ては自分自らがはぐくまれしもので、將來は子孫誰もがはぐくまれ得られぬ風習——を時折筆にしてゐたものを集めて小縣郡民俗として見たい』との考から、まづ本書をなしたので、其他の民俗の各集をも大成されんこ